

武家社会における文人精神の源流 ——渡辺崋山、中村敬宇、広瀬淡窓を中心として

別 所 興 一

〈キーワード〉

①文人精神 ②渡辺崋山 ③中村敬宇 ④広瀬淡窓 ⑤武断政治の弊害

〈論文要旨〉

渡辺崋山、中村敬宇、広瀬淡窓ら江戸期の文人は、武家社会の業務を本務として果たしながらも、“余技”の学芸において“文”を“武”に優先させる王道政治を力説した。彼らは弱肉強食の国際権力政治への参入をめざす明治政府とは異なるもう一つの道（文治政治に基づくアジア型の近代社会）の可能性を提起した。

The source of cultural person's spirit in the samurai society,
on mainly Watanabe Kazan, Nakamura Keiu, Hirose Tansou

Koichi Bessho

〈Key Words〉

① cultural person's spirit ② Watanabe Kazan ③ Nakamura Keiu ④ Hirose Tansou
⑤ the negative effects of power politics

〈Summary〉

Although the cultural persons in Edo period (Watanabe Kazan, Nakamura Keiu, Hirose Tansou) perfomed their main work of samurai society,they emphasized the policy of royal road to put the literary before the military in the arts as a hobby. They raised the possibility of the alternative road of the Meiji government to enter power politics. This road lead to the government by the literary in the modern society of Asin type.

武家社会における文人精神の源流

——渡辺崋山、中村敬宇、広瀬淡窓を中心として——

別所興一

1 「文人」の意味・内容の違い

まず最初に、「文人」という言葉の意味・内容が、江戸期の日本と同時代の中国・韓国では、大きく異なることを指摘しておきたい。

吉沢忠の『日本の美術二五 南画』（小学館 一九七二）によれば、中国や韓国では、文人とは科挙試験をパスした士大夫・国家官僚であり、多くは大地主としての経済基盤を持っていた。彼らは経済的な保障があったから、上官の命令に不服な場合は、官仕えを辞めて在村地主としての生活に復帰することができた。その特権的な身分から、押し着せの慣習・伝統に気兼ねすることなく、自由に読書したり、詩作や画作に取り組んだりすることができた。これとは対照的に日本の文人は、学問・書画をよくするものの、多くは將軍や大名に官仕えする官僚であり、その禄（給料）を離れると、たちまち生活困難に追い込まれるという不安定な境遇であった。したがって、彼らは上官から無理難題を突きつけられた場合、逃げ道がなかったから、もっぱら忍従するしかなかった。彼らは公的な場での自分の意思表明を断念し、公務から離れた画作や私信の中で「自娛」のため自由な表現に取り組み、自足せざるをえなかったのである。換言

すれば、中国・韓国では士大夫の文人が武人を従属させていたのに、日本の文人や儒者は、將軍や大名という武人に仕官し、忍従の生活に甘んじていたのである。

他方、中国や韓国においては、すぐれた人材を「科挙」によって国家へ引き上げ、その豊かな人材を国家の運営に十分に活用することにより、皇帝権力の安泰を図ってきたが、その反面、既得権を死守する守旧勢力が強くなり、古い体制を内部から瓦解させることが困難になった。これとは対照的に江戸期の日本では、士農工商の身分制や家父長制が強く、身分の変更や上昇が困難だったため、中下級武士や農工商は、その欲求不満を経済活動や文芸の世界で解消しようとした。経済活動について幕藩領主は、生産から流通まで農工商にまる投げしていたから、才覚のある農工商は勤勉と節儉に努めて家産を増やし、幕藩領主も無視できないほどの経済力を持つにいった。

また、戦乱がなく、武力を使わない歳月が続いた結果、中下級武士だけでなく庶民の中からも知的向上心を持ち、学問や文芸の世界に参入する者が現れ増大した。彼らの指導者役を務めたのが、硬直化した幕藩体制の枠内に収まらず、そこからはみ出した「余計者」・「疎外者」意識を持つ知識人武士・文人たちであった。彼らは与えられた公務をきちんと果たしながら、持って生まれた学芸の天分を「余技」として発散させ、公務以外の世界での自己表現活動に生きがいを感じていたのである。もう一方の指導者役は、幕藩行政から自立した民間私塾の経営者・町人学者の文人たちであった。彼らは現実政治には一定の距離を置きながらも、自然や社会の出来事に積極的

な関心を持ち、塾生たちと共に修身と天下国家のあり方を考えようという姿勢を保持していた。

このように本業に従事しながら余技に励む文人たちの動向は、『論語』の「ひろく衆を愛して仁に親しみ、行ないて余力あれば、すなわちもって文を学ぶ」という教えに従ったものであり、広く全国の有徳人に影響を及ぼすようになり、その結果、全国各地に学芸ネットワークのようなものが広がる機運をつくった。こうして強固な身分制の下で民間社会に蓄積された豊かな経済力と知力は、幕藩権力に自壊作用を促す基盤づくりにつながった。その結果、丸山真男の言葉を借りれば、「爪の先まで武装し、一朝事あるときには直ちに戦時総動員体制にきりかえられるような統治組織と反乱・暴動・内乱等のあらゆる萌芽をいち早く摘みとるように網の目のようにはりめぐらされた（相互監視と密偵の）メカニズムとをもって」人民を支配した国家が、徐々に根底から掘り崩されることになった。すなわち、江戸期の日本は、科挙制を持つ中国や韓国よりも、一歩先に近代化の道を歩むことができたのである。

2 渡辺華山の文人精神

渡辺華山（一七九三―一八四一）は、江戸後期の名高い文人画家であり、開国前夜の開明思想家としても知られるが、他方、三河田原藩の江戸家老職をつとめながら画作にとり組む、という矛盾した生活を営んでいた。

天保十年（一八三八）四月、四十七歳の華山は、藩の年寄役（家

老職）の辞職を決意して、『退役願書』を田原藩主に提出した。辞職の表向きの理由としては、病気をあげているが、その主要な理由は、最愛の弟五郎の病没の衝撃もさることながら、藩政について他が家老職なるがゆえに却下されたりしたこと、もっとも自由に行動がとれる境遇を切望するようになったことである。今一つの理由としては、藩主から国家老への転任の内示があったことが考えられる。華山は生涯の大部分を江戸の文人たちと交わりながら過ごしてきたから、それを断ち切って国元の農村統治を本務にすることは、耐え難いことだったのである。退役の願いは却下されたものの、国家老への転任の件は沙汰止みになり、華山は一種の『執行猶予』のような状態におかれることになったのである。

かつて華山は、年寄役になって間もない天保四年（一八三三）の日記に、「我が手即天下の手、我が身即滕薛の宰」と書いた。自分は絵を描かせたら天下の大画家であるが、自分の一身はふじかずらという雑草にも似た小藩の家老にすぎない、という嘆きの告白である。自分の画技に対する自信と家老職への不満は、その後ますます強まり、『退役願書』提出後に田原藩政改革派の同志真木定前に宛てた手紙では、「先ず予がからだは、燧石箱ほどの家老、味噌用人に毛のはえたる、十分事成つた処が、掌ほどの片田舎なり。予が手は天下百世の公手、唐天竺までも筆一本あれば、公行でき申し候。なんとおしきものにはこれなきや。嗚呼我が憐れむ人、春山と足下（あなた）ばかりなり」と、自分の画技に対する自信のほどを述べている。田原藩の家老のような境遇を不本意とし、そこから脱け出

して画家としての大成をめざしていたのである。

その反面、華山は天保八年（一八三七）十月の江川英龍宛ての手紙の中で、絵画はもともと一家の貧窮を助けるために習ったものだったが、その風流の道がだんだん面白くなったこと、後に士大夫と交際して武士たる者の本分が分かった頃には初老となり、とうとう一介の画家のようになってしまったことを、やや自嘲的に告白している。さらに絵画などをやっているのは、*「淫盗の媒」* になるだけで、実は自分も飽き果てたのだが、長年打ちこんできただけに今さら捨てがたく、だから続けているような次第である、とつけ加えている。ここには初対面直後の自己紹介的な手紙のせい、かいくぶんの気負いや謙遜が認められるものの、ただの画家と見られることにはつきりと不満を表明している。絵画にひたすら打ちこもうとする気持ちと、それに反発して士大夫の本分を守ろうとする気持ちとが、華山の内部に共存し、矛盾対立していたと言えるであろう。

このような政治と絵画の矛盾を解消するために、華山は *「退役願書」* の後半部で、次のような画論を展開している。すなわち、絵画で第一に大切なのは心であって、志が立たなければ現実を正しく描写することはできない。しかし、心ばかり勇み立っても、手が心の命ずる通りに動かなければ、絵にならない。手足腹背爪髪までも総動員して全力を尽くさなければ、真の絵は描けない。それと同じように、藩侯や奉行はもちろん、一般武士や中間（ちゅうげん）に至るまで政治に心を用いて率先垂範を示さなければ、民百姓を治めることはできない、というのである。そして、「画道も治道も一理にして二理はこれなき間、画道をもつて治道に試み申すべき」と記し、

絵画が政治と無関係な道楽でないこと、政治においては藩侯の率先垂範が何よりも大切なことを力説している。しかし、この場合の政治とは、藩侯を心に、中間や足輕を爪や髪にたとえていることから明らかなように現存する封建的な身分階級制度を前提にした政治である。華山は武士としての治道心と絵画を直結することにより、絵画に打ちこむ自己の理論づけに成功したが、他方、現在の封建的な幕藩体制を肯定する結果になったのである。

このような絵画と政治を一体のものとする華山の考え方は、天保十年（一八三九）五月に蛮社の獄で捕えられたことを契機として、たちまち行き詰まることになる。同年六月十一日附けの門弟宛の獄中書簡で、華山は「親よりも主君を重んじ、天下国家の問題を第一義に考える。こうした私の考え方は、画の門人たちを多少とも善事に導く役割を果たしてきた。その結果、天下国家に貢献することにもなったと思う」と書いている。華山がこの時点では、絵画と政治を結びつけようとしていたことがわかる。しかし、六月二十七日附けの書簡では、「自分の本来の性格は隠遁者のなのに、時のはずみで有為者のように振る舞っていたにすぎない。このたび奇禍を蒙ったのも、自分のこれまでのやり方に誤りがあったからである。そうは言っても、外国が侵攻してくることを思うと、絵を描くことも止めたい」と心変わりすることもある」と表明している。この書簡では、絵画と政治の間に亀裂が生じ、絵画と政治はどちらか一方しか選べないもの、というふうに従来の考え方を修正している。華山は田原に蟄居するようになってからも、絵画と政治の両極の間を揺れ動く。その矛盾した考え方は、政治の現状を容認せざるを得ない

崋山と、それを批判しようとする崋山との、矛盾葛藤に根ざしたものとと言えるであろう。

上記のように苦悩する文人政治家だった崋山は、自らが家老職として担当した田原藩政には、どのような姿勢で臨んだのであろうか。天保九年十月に崋山は江戸から国家老へ宛てた書簡の中で、次のように藩政の心構えを説いている。

「右の通りの世の中故、田原は武を構じ徳を敷き、天地の間に独立致し、掌大の地を百世に存し候様、御工夫第一也。何でも徳にこれなくては危し。」

この引用文の前文において崋山は、幕閣の視野の狭さや腐敗、さらに藩財政の苦境を指摘した上で、このような世相だからこそ、わが田原藩は最新鋭の海防策を準備し、小藩ながら仁徳のある政治家がこれを実施して、百代後まで繁栄するよう工夫に努めること、何事でも徳を忘れると危機にさらされることを、よく自覚するよう力説している。ここには、法律によって上から強権的にことを解決しようとする法治主義を排して、開明的な指導者の道徳的感化によって人々を信服させていく、という徳治主義の理想を高く掲げ、養才教化を藩政の根幹におく崋山の政治姿勢が示されている。

これより先、天保八年十一月、崋山は田原藩御用金調達のため大坂に出張中の部下に送った書簡の中で、談判交渉の訓戒八ヶ条を示したが、その一部を紹介したい。

「一、眼前の繰り廻しに百年の計を忘るなかれ。」

「二、人を欺かんとする者は人に欺かる、欺かざるは即ち己を

欺かずといふ事を忘るなかれ。」

「二、基立て物従ふ、基は心の実といふ事を忘るなかれ。」

経済活動においても、誠実という徳を基本にすべきことを示した崋山の文言である。

さらにこれより先、天保七年の飢饉の際に崋山が江戸から国元に送った数通の「凶荒心得書」の中にも、徳治主義の思想が表明されている。まず藩主三宅康直への上書には、藩主のとるべき政治姿勢を次のように指摘している。

「誠に御領中幾万人の内、たとへいかに賤しき小民たりとも一人にても餓死流亡に及び候はば、人君の大罪にて候。……そもそも君の職と申すは、この民有りてこの君有りの天理にて、この君有りてこの民有りの節にはこれなく候。」

藩政を下から支える領民の生活を守る責任を平素から自覚し、民の生活を忘れて遊楽にふけることのないよう藩主をきびしく戒めた諫言である。この時代において一藩の家老が藩主に対して藩政の根本原理をこれほどきびしく要求した例は、他に見られない。また、一国一郡の主たる藩主は、何にもまして尊い宝である領民を救うためには、秘蔵の宝物を残らず差し出して米に替えることをためらってはならない、と説いている。このような藩主の御一念の有無によって領民の安危が決まることを自覚し、身を修めることが、藩主の第一のお務めである、と崋山は進言したのである。

崋山は同じ上書の別の箇所でも、農民統治の心構えについて次のように言及している。すなわち、藩主の立場から農民の働きぶりを見て不満な箇所を見つけた場合でも、いちいち警告や干渉をおこなっ

たりすると、農民たちはそれにとらわれて萎縮し、十分な成果をあげられなくなる。したがって最初の大きな方向づけを与えたら、後は幼稚で出来ない面が認められても、農民たちが自力で活動するその過程を尊重してやるのが大切である。そうすれば、民の父母としての藩主の仁徳が農民たちに通じるであろう、と説明している。このような崋山の農政思想は、「百姓をばただよらしめて知らしめざるの政」こそ国家を富強にする（『草木六部耕種法』）と訴えた佐藤信淵（一七六九―一八五〇）の農政思想と質的に異なるものと言えるであろう。

崋山は蛮社の獄（一八三九）により幕政批判の罪で国元の田原に蟄居するようになったが、そのころ腹心の部下に宛てた書簡の中で、農村統治の仕事は、ずっと先のことを見通すことのできる卓識洞見が必要であること指摘し、それは五年くらいこの地に居住しなければ身につくものではないことを強調している。ここには、久しく江戸定府の生活をおくり、藩政の土台である農村の実情にうといまま江戸詰家老としてさまざまな命令・指示を出してきた自己への反省を読みとることができる。崋山は田原での蟄居生活を通じて、五年くらいこの地に居住をしなければ藩政を担当する資格のないことを思い知らされたようである。そして崋山はここでも、藩政の復興は最終的に「養才教化」を基本とした徳政のいかに関わっていることを力説している。そこに文人政治家としての崋山の基本姿勢が、鮮やかに示されていると言えよう。

3 中村敬宇の文人精神

明治前期の啓蒙思想を代表する明六社グループの有力メンバーである福澤諭吉（一八三五―一九〇一）は、明治十一年（一八七八）の著作『通俗国権論』では、「百巻の万国公法は数門の大砲に若かず」と説き、「世界普遍の道理」よりも武力を優先する軍事志向を表明している。さらに明治十七年には自分の主宰する『時事新報』において「脱亜論」を唱え、もっぱら富国強兵につながる智力の増進を力説するようになった。同じ明六社グループに所属しながらも、こうした論吉とは対照的な道を歩んだ思想家として中村敬宇・正直（一八三二―九一）が注目される。

下級武士の家に生まれた中村敬宇は、幼少期から漢学の習得につとめ、三十一歳の若さで幕府儒官の要職に抜擢された。また、十六歳から密かに蘭学を学び、二十七歳ごろには「洋夷モ亦人ノミ」「洋学ナルモノハ、吾ガ道ノ外ナル能ハザル所也」という見解に達していた。三十四歳から英語を学び始め、その翌年には自ら志願してイギリスに二年間留学した。明治元年（一八六八）六月に三十五歳で帰国したものの、徳川家直属の儒者として静岡に転居せざるを得ず、その地でS・スマイルズ原著の『セルフ・ヘルプ』の翻訳に取り組み、明治四年に『西国立志編』と題して刊行した。長年の武家社会の惰性により軍備拡張を最優先すべしという風潮の中で、敬宇はこの訳書の出版意図を次のように説明している。

「余この書を訳すや、……子なんぞ兵書を訳さざるやと。余い

わく、子、兵強ければ、すなわち国頼りて以て治安なりと謂うか。かつ西国の強きは兵に由ると謂うか。これ大いに然らず。それ西国の強きは、人民の篤く天道を信ずるに由る。人民に自主の権あるに由る。政寛やかに法公けなるに由る。……スマイルズいわく、国の強弱は、人民の品行に関かると。またいわく、真実良善は品行の本なりと」

「かの土の文教昌明にして、名の四海に揚がるは、実にその国人の勤勉忍耐の力に由り、しこうしてその君主は得て与からざるを知ることあり。けだし世人、余がこの訳書を読まば、すなわち西国昌盛の故に憬然たるべし」

敬宇は西欧諸国の富強の要因は軍事力ではなく、そのすぐれた「風俗（生活習慣、政治意識など）」と「品行（人格、ふるまい）」にあると考え、さらにその源泉はキリスト教であることを発見したのである。この書の翻訳は、敬宇が幕府の敗北によって在野の人になった体験を踏まえて、その観点から人間や社会をとらえ直す過程で進められたから、その文人としての熱い思いが、明治維新直後の混乱した世相の中で新時代の生き方を模索していた青年たちの心をとらえて、数十万部におよぶベスト・セラーになった。明治前期の青年たちに軍国日本とは違ったもう一つの将来像を与えたのでなろうか。敬宇はこの訳書に続いて、J・S・ミル原著の『自由之理』と題する訳書を出版した。この訳書も多くの読者を得て、自由民権思想の普及に寄与することになった。

敬宇は明治七年（一八七四）にキリスト教の洗礼を受けたが、生涯儒教思想を捨てることはなかった。敬宇は幕末期から儒教思想に

基づく経世家としての自覚を持ち、軍事や経済の問題にも関心を抱いていたが、文人精神に立脚した彼の主要な関心は儒教的な「道理」の達成はいかにあるべきか、ということであった。その関心に基づいて、積極的に西洋近代思想を紹介する仕事に従事したのである。

中村敬宇は国家防衛の中心を「力」ではなく「道理」であると説くとともに、この「道理」を世界に対して押し広げようとする積極的な国際平和主義を提唱した。近年の国家間の「兵力ヲ以テ競フ」状態と世人の互いに「温情ヲ欠ク」状態を「妖気」と批判し、高い道徳を基盤にした国際平和を実現するためには、「愛敬ヲ学ビ、愛敬ヲ行」わねばならないと力説したのである。当時は「腕力世界」優勝劣敗「競争社会」と呼ばれる帝国主義的な植民地争奪が激化する国際環境にあり、しかもそれを合理化するような「社会進化論」の流行という思想状況の中で敬宇は、日本の富国強兵は日本がどれだけ「道理」を達成できるかに関わっている、と強く主張したのである。大切なのは仁善を尽くすことであり、そうすれば富国強兵も自然にかなう、という樂觀的な考え方であった。自国の富国強兵を主張する場合でも、「普遍的な道理」への配慮があったから、野放図な侵略主義に陥らずに済んだと言える。

中村敬宇にとって世界平和とは、人々がその下で単に豊かな生活を楽しむだけでなく、さらに知性や徳性を向上させていく状態を意味していた。人民の経済的繁栄は、人民の「品行」によって支えられなければならないから、今後の教育の最大の課題は、「人民ノ性質ヲ改良スル」ことにありと訴えたのである。

明治六年の「米利堅志序」では、世界の諸国が土地と人民とを返

上し、万国公法の下に一大国会が設立され、世界連邦が形成されるような日がいつか到来する、という世界平和実現の壮大な構想を思い描いていた。また、「支那不可侮論」において、明治日本の「自国ノ開明ヲ自慢シ、清国ノ委靡不振ヲ輕侮スル風潮」を、「人ノ美服ヲ借り着テ悪衣ノ人ヲ卑シムガ如シ」と批判した。敬宇は、中国や朝鮮への蔑視感情をまったく持たず、日・清・韓三国の関係を同文同種ととらえ、西洋列強の弱肉強食的なアジア侵略に対しては連帯して抵抗すべし、とも説いていた。しかしながら、往年の渡辺崋山の文人精神や世界認識を思い起こさせる敬宇の以上のような言説に対して、明治国家の指導者たちは共感や理解の姿勢を示すことなく、逆に無意味な空想的言説として嘲笑・黙殺したのである。

強いて中村敬宇の文人精神の弱点を挙げると、敬宇は儒教文明と西洋文明を共通面でとらえ、その異質性を十分に認識しなかったために、旧来の儒教の通弊に対する批判が甘くなり、伝統文化の無條件的肯定につながる要素を持ったことである。その結果、敬宇の「信仰の自由」をはじめとする内面的な自由の主張は、結局のところ皇国思想を体現した明治国家の国民教化政策に取り込まれることになったのである。

4 広瀬淡窓の文人精神

広瀬淡窓（一七八二―一八五六）は、豊後国日田（大分県日田市）の商家（諸藩の御用達をつとめる）の長男に生まれたが、生来病弱だったため家業を弟に譲り、生涯塾教育に専念した。幼少期から四

書五経を学び、青年期には主に徂徠学の流れをひく亀井南溟に師事した。徂徠学の経世論の影響を受けた淡窓の藩政改革意見書『迂言』（一八四〇）は、当今の財政困窮を招いた要因として、六つの「風俗の悪弊」を指摘している。すなわち、「尊倨高大」「誇張矜伐」「秘密閉固」「門地高下」「先格因循」「文盲不学」である。この六弊のうち、「五ノ弊習モ、此処ヨリ起リ、又其弊ヲ改ムルモ、此所ヨリスルニ非ザレハ、功ヲナシ難シ」と指摘する「文盲不学」こそ諸悪の根源であり、それを一掃する学校教育の緊要性を強調している。ここには徂徠らが重視した政治・経済の制度改革への言及は見られず、もっぱら人生上・生活上の心構えとして説かれている。

特に淡窓が憂慮したのは、「今時ノ風俗ヲ見テハ日本開闢以来ノ事ト思ヒ、又異国ノ事トテハ少シニテモ其レヲ取り用フルヲ恥辱ノ様ニ思フ。又治乱興衰ノ理ニウトク、世界ハイツ迄モ今ノ通りト心得ル」救い難いまでの現状保守の「弊習」であり、これを打開・克服するためには徂徠学が軽視した「修身・徳行」を重視し、道徳的修養を加味した観点で幅広く学習すべきだと力説したのである。

淡窓四十四歳の著作『約言』の主意は、「天道ノ有知ナルコトヲ明シテ、人ニ天ヲ敬セシメンカ為」であり、「天ニ則リ、天ニ事ヘ、天ヲ欽ミ、天ヲ樂シミ、天威ヲ畏レ、天命ヲ奉行ス」という「敬」を人間のとるべき道であることを明らかにすることであった。また、淡窓の考える「天」は、人間の所行における善惡に対する「禍福応報の神」でもあったから、「人ヨク天ヲ敬スレハ、天其衷ヲ導キ玉フ。故ニ自然ニ過チ少ナシ」と人間本性への信頼の立場を表明している。

このように「敬天」をめざす淡窓は、同じ『約言』の中で、「上

の下におけるや、頑冥聾昧の徒ありとも、あへてこれを愛育せずんばあらず。いはく、これ天我に命じこれを教へしむるなり」とと説き、教育が自分の天職であると宣言している。淡窓は二十四歳から晩年まで約五十年間、咸宜園という私塾を主宰したが、この塾名の「咸宜」とは「ことごとくよろし」という意味で、すべての人に門戸を開放し、学問の機会均等を保証するものであった。身分のいかんを問わず入門を許したので、高野長英・大村益次郎ら有名な洋学者も含む多種多彩な門人にぎわった。門人数は彼一代で三〇八一人に達し、九州だけでなく全国各地から集まった。そのうち武士の比率はわずか五、六パーセントで、三割強を占める僧侶を除いても、残り六割以上が百姓・町人身分で占められていた。しかも、この私塾は、幕府や藩などからの補助金はほとんどなく、入門者の納める授業料で運営した純粹の民間教育組織であった。

咸宜園の教育方針で注目すべきは、淡窓創案の三奪法と月旦評というシステムである。

三奪法とは、入門時に年齢・学歴・門地をいったん白紙に戻すことで、家柄第一主義の横行した藩校などの悪習を一掃した上で、学習進度により十九級の等級制を設けたことである。月旦評とは、塾生たちは毎月一回、厳正な学力評価が行われ、塾での席次が更新される制度である。そこには学外の有力者による干渉や情実のいりこむ余地はなかった。しかも、師匠の一方的な講義をまる暗記させるのではなく、「会読」という一つのテキストを集団で討論しながら読み進むという方式を採用していた。そこでは、経書の読解能力によって席順が決まり、緊張に満ちた問答により席順が替わるという

徹底した「実力主義」の教育方法であった。学校を身分制社会の「世俗」原理から隔離することによって、自由で独立した「文人社会」の空間を創出したと言えよう。しかし、一方では「鋭きも鈍きも共に捨てがたし 錐と槌とに使い分けなば」という淡窓自作の「以呂波歌」に見られるように、単一の評価原理だけで塾生たちを萎縮させないよう、一人ひとりの個性を尊重する配慮があったこともつけ加えておきたい。

こうした独特の塾経営に対して、幕府代官によるいろいろな名目をつけた強圧的な「行政干渉」が何度もあり、淡窓もやむをえずそれを受け入れ、月旦評や人事の公正さを損なわれたこともあったが、おおむね「学校の自治」を守り抜くことができた。しかし、「門地高ケレハ、不才不徳ニテモ、恥ツルニ及ハスト立テ、一切ノ芸業ヲ修セス。門地卑ケレハ、才徳芸能アリテモ、貴フニ足ラスト立テ、一切ノ能者ヲ用ヒス」という身分制の壁を打破するためには、まだ遠い道程が残されていたのである。

上記のような教育実践を内側から支えた淡窓の人間観に再び目を向けると、淡窓にとって悪とされたのは、人欲そのものではなく、その節度のない放恣な追求であった。人間にとって天から与えられた「自愛心」が有効に自己保存を実現するためには、放恣を抑制し、「人ト之ヲ共ニ」する「思慮」、つまり他人に危害を与えたり排他的な欲求充足にならないようにする「思慮」が必要だと主張した。その「思慮」こそが人を「禽獣」から区別するものだ、と淡窓は説明したのである。

このような淡窓の文人らしい柔軟な発想法には、明治初期の天賦

人権論を準備する思想の胎動を予感させるものがある。淡窓は九州片田舎の一介の町人学者であったが、決して時代の動向から取り残された思想家ではなかったのである。しかし、淡窓の歩んだ道は、^{『武』}を前面に出しての覇道を突進した明治国家の路線とは、どこか大きく異なっている。淡窓の思想には、^{『文』}を前面に出しての王道を立て通すもう一つの^{『アジア型近代』}の道につながる可能性が孕まれていたのではなからうか。

『主な参考文献』

- 吉沢忠著『日本の美術二五 南画』（小学館 一九七二）
 子安宣邦監修『日本思想史辞典』（ぺりかん社 二〇〇二）
 青木美智男著『全集・日本の歴史 別巻 日本文化の原型』（小学館 二〇〇九）
 小澤耕一・別所興一他編著『渡辺崋山集』第三・四巻（日本図書センター 一九九九）
 別所興一著『渡辺崋山 郷国と世界へのまなざし』（あるむ 二〇〇四）
 別所興一「渡辺崋山の徳治主義と世界認識——明治国家の喪失したもの」（第九回東アジア実学国際シンポジウム報告 二〇〇六）
 高橋昌郎著『人物叢書一三五 中村敬宇』（吉川弘文館 一九六六）
 『明治文学全集三 明治啓蒙思想集』（筑摩書房 一九六七）
 石田雄「中村敬宇と福沢諭吉——西欧思想への対応における二つの型」（『東京大学社会科学研究所紀要』二八巻二号 一九七六）
 荻原隆著『中村敬宇と明治啓蒙思想』（早稲田大学出版部 一九

八四）

- 源了圓「幕末・維新期における中村敬宇の儒教思想」（『季刊日本思想史』二六号 一九八六）
 薄 培林「中村敬宇と近代中国」（日本比較文学会『比較文学』四三号 二〇〇〇）
 平川祐弘著『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク』（名古屋大学出版会 二〇〇六）
 『淡窓全集』全三巻（日田郡教育会 一九二五～二七、複製 思文閣出版 一九七二）
 松本三之介「広瀬淡窓の哲学——状況の動態化と思想の対応」（『季刊 日本思想史』二号 一九七六）
 田中加代「教育理念としての『敬天』」（『季刊 日本思想史』一九号 一九八三）
 小島康敬著『徂徠学と反徂徠 増補版』（ぺりかん社 一九九四）
 水谷三公著『江戸は夢か』（筑摩書房 一九九八）
 前田勉「広瀬淡窓における学校と社会」（愛知教育大学『日本文化論叢』一七 二〇〇九）
 「付記」本稿は二〇一一年五月二〇～二二日にリーガロイヤルホテル京都で開催された第一〇二回公共哲学京都フォーラム「日韓哲学対話 サムライ（武士）とソンビ（文人）」で研究報告した小論を再構成したものである。

別所興一 元・愛知大学教授（日本思想史）

元・人間環境大学非常勤講師